

穂学

令和元年度

広州日本人学校 学校便り

[No. 5]

令和元年8月23日(金)

発行責任者 校長 喜屋武浩司

「一人一人が持続可能な社会の担い手①」

校長 喜屋武 浩司

夏休みも終わり、19日から二学期がスタートしました。夏休み中の事件・事故などもなく、始業式で子どもたちの元気な笑顔を見てとても安心しました。この夏休みが、子どもたち一人一人にとって、貴重な経験や初めての体験など、心や身体の成長につながる有意義な休みであったことを願います。

一学期に17名の児童生徒が退学（転出）しましたが、この二学期から新たに32名の児童生徒が編入学し、全校児童生徒数も過去最高の461名となりました。多くのお友達を迎え、これからもお互いを尊重し合い、そして切磋琢磨しながら、本校の目標である「個性豊かな国際社会に生きる児童生徒」となるように努力していきたいと思えます。

さて、来年度（中学校は二年後）から完全実施される学習指導要領では、子どもたちを取り巻く環境を次のように解説しています。「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている」とし、「一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される」と続きます。保護者の皆さんにとっては、上記のような現代社会が直面している様々な課題を、もうすでに肌で実感されていることでしょう。

また、貧困、紛争、テロ、気候変動、資源の枯渇など、人類はこれまでになかったような数多くの課題に直面しています。このままでは、人類が安定してこの世界で暮らし続けることができなくなってしまうと言われていています。そのような危機感から世界中で様々な立場の人々が話し合い、課題を整理し、解決方法を考え、2030年までに達成すべき具体的な目標を立てたものが「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals：SDGs）」です。

八月に東京品川区にある「ユニセフ会館」（写真右）を訪ねました。「unicef（ユニセフ）」は、世界中の子どもたちが平和に、そして健康に暮らせるように活動する、国際連合の中の一つの機関です。子どもを取り巻く環境は世界中様々です。飢餓や貧困、紛争や災害などを知り、これまでに学校や個人でユニセフ募金などに協力したことのある保護者、児童生徒はたくさんいると思えます。

「一人一人が持続可能な社会の担い手」となれるよう、ユニセフ会館で学んだことや今後学校でやるべきことを、「穂学」でも紹介していきたいと思えます。

